

《第484回（2021年7月8日）子どもの本の読書会記録》 参加者：11人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『カラスのいいぶん 人と生きることをえらんだ鳥』 嶋田 泰子／著，岡本 順／絵 童心社

今回の本は、今年度の読書感想文全国コンクールの、中学年の課題図書です。カラスは、私たちの身近にいる鳥ですが、気味が悪い、怖い、ごみをあさって汚い、といった悪い印象を持たれがちです。この本の作者もある日、カラスに散々な目に遭わされて、カラスが嫌いになりました。しかし、作者はそこで終わりませんでした。「カラスごときにまけたくない、どうにか、カラスをギャフンといわせて、人間を見くびってはいけなさと知らせたい」と、「カラスのよわみをにぎる」ために、カラスの観察を始めるのです。

カラスに関しては専門外の作者ですが、家の周りのカラスをよく観察し、勉強する中で、カラスの見分けがつかうように。作者が「クロスケ」と名付けたハシブトガラスを中心に、カラスの驚くべき生態が語られます。

次に、読書会に参加された方の感想を紹介します。

- さりとて読める本。カラスの本は読んだことがなかったので、カラスの生態に驚いた。自分自身は、カラスに野菜を荒らされたことがあるので好きではない。人間が取り寄せた卵をとっていくほどの賢さをもっていたり、のどの下が伸びるのでたくさんのお腹を詰め込めることができたりなど、全ての知識が新鮮だった。
- 期待して読んでいたが、あまり真新しいことは書いていなくて、あれ？と思った。自分がカラスと出会った時の体験を思い起こしながら読んだ。人間の食べ物をとっていくカラスの知恵に感動したり、松島で何万羽ものカラスが飛んでいるのを見て、ヒッチコックの『鳥』を思い出したり……。課題図書としては最適な本だと思った。
- 「カラスにも言い分がある」というスタンスで、生活者目線でカラスの観察をしているところがいい。しかし、作者がカラスにビーフジャーキーなどのエサやりをする場面は、基本的に絶対だめだと思った。しかも、隣の家に住み着くカラスに。この場面を見て、こどもはどうとらえるだろうか。まねする子が出ないといいが。

●カラスはここまで賢いのかと驚いた。作者が根気強くカラスの観察をしたように、カラスもまた人間を観察しているのではないか。人間の挙動をよく見て、力強く生きていたんだなと思った。しかし後半になるにつれ、どんどん作者とカラスの世界に収束していったのが、もやとした。もっと広がりのある終わり方がよかった。

●大人より、こどもの方が動物をよく見ていることが多いので、大人の作者がこんなにもカラスに興味をもって観察することは珍しいと思った。自分がこどもの頃、けがをしたカラスを助けたら、その後人間を怖がらなくなって、寄ってきて「オハヨー」と人の言葉を喋るようになった。そんな記憶を思い出した。

●カラスといえば、童謡「七つの子」のイメージ。『カラスのいいぶん』を読むと、タマゴを孵すために必死で生きているということが分かった。そういう姿を人間が見て、このような歌が生まれたのかもしれない。そのような牧歌的なイメージと、畑を荒らすカラスという現実的なイメージの差が大きいと感じた。

●視点がすごく面白い。この視点、どこかで読んだことあるなと思ったら、シートン動物記の『カラスのシルバースポット』だった。自然と人間のバランスについて、身近な事柄として考えさせられる終わり方だった。カラスの特徴を、「あゆみ」として、学校の通知表風に表現するのもユニーク。

●「はじめに」を読んで思わず笑った。カラスにギャフンといわせたいなんて、作者と同じ目にあっても私には出来ない発想。カラスが頭が良いのは聞いていたけれど、ここまで頭脳犯とは。巢の存在が気づかれないように、ウンチも地面に落とさないなんて感心した。貯食することも驚きだし、遊ぶに関しては絶句した。

次回 9月9日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『ミス・ヒッコリーと森のなかまたち』キャロライン・シャーウィン・ベイリー/作，坪井 郁美/訳，ルース・クリスマン・ガネット/画 福音館書店
申込み・参加費不要